

異なる世界を否定せずに知ろうとすることの重要性
藤井 京香（看護師・保健師を目指す大学院生）

白石先生、今回は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

学生時代の実習で精神疾患を持つ方と関わる機会がありましたが、当時患者さんに対してどう接していけばよいのか悩みました。今も自分の中で明確な答えは出ていませんが、今回の講義でその答えのきっかけに気づけたように思います。

精神疾患を抱える方や症状を変えるのではなく、周囲がその方をどう捉えるかに着眼されている点が新鮮でした。私は今まで、精神疾患の症状を抑えなくてはという想いに囚われていて、患者さんの体験や見え方を尊重できていなかったと気づくことができました。

精神看護の実習でも、私自身が考えた、こうであれば症状が良くなるのではという理想像に患者さんを近づけたい、でもなかなか上手く促せないということがありました。

その体験を改めて振り返ってみて、患者さんの現状を肯定できていなかったこと、患者さんへの理解が不十分であったことが上手くいかなかったと感じた要因なのだと思います。患者さんの現状を肯定的に捉えることができれば、支援者側である人たちも、こうしなければと焦ることなく接することができるのだと考えました。

そして、こちらが能動的に働きかけると相手は受動的になってしまい、上手くいかないということを知り、確かにそうだと納得しました。子どもと学校の話はとても理解しやすかったです。私も塾のアルバイトで子どもに教えることがあります。学習者に意欲があってもその気がない限り、指導する側がいくら言っても響かないことが多いです。保健師の業務でも、支援が必要だと思われる人に対して、こちらから積極的に働きかける必要があると考えていましたが、本当にそれでいいのか考えるきっかけになりました。

支援を必要としていない場合は、無理に支援につなげるのではなく、その人の生活スタイルや価値観を理解して、本当に必要かを見直す視点も持たなければならぬと考えました。また、「治す／治さない」の軸の外に大事なことはあるとは、社会や環境、制度、周囲の人が対象の人を見る視点といったことを変えることだと理解しました。

身体障害や知的・発達障害そして認知症などでも言えることですが、その人からどう見えるかを知ろうとし、周囲をどう変えていけば過ごしやすいかを考えていく必要があるのだとわかりました。

講義を通して、今まで自分になかった視点を知ることができて、面白さを感じています。自分と異なる世界の見方を恐れずに、積極的に知ろうとしていきたいと考えました。